## 【特別寄稿】 茨城から、そして全国へ

會田 雄一（筑波大学医学医療系 助教）

今後 20 年間で臨床検査の分野においてもユビキタス化がますます進むと考えられ、その兆しとして今年 4 月に制度化された「検体測定室」が挙げられます。病院に目を向けると、現状においても、検査室には多くの医療機器が並び、迅速に正確な検査結果が医師に報告されています。医療機器が進歩すれば、今は一部の病院に限られている検査が多くの病院で簡便に実施されるようになることが予想されます。こうした状況を踏まえると、検査結果を出す工程では臨床検査技師の役割は小さくなりつつありますが、得られた検査結果の妥当性、つまり臨床検査の質の保証においてはその役割はますます重要になると思われます。今後、都市と地方の格差、また同じ地域でも病院間の格差が大きくなるかもしれませんが、検査室が病院のアキレス腱となるような状況、例えば、最新の医療機器を有し、医師も確保できている病院に、知識・技術の優れた臨床検査技師がいないという状況は避けなければいけないと考えています。そのためにも、勤めている地域に関わらず、生涯を通して学び続けられる環境を作っていくことが重要になると思われます。

いわゆる地方である茨城県に立地する筑波大学と茨城県立医療大学が、この度、新しい試みを共同で進めることになりました。両大学が申請した「多職種連携医療専門職養成プログラム」が文部科学省の課題解決型高度医療人材養成プログラムに採択され、現在、来年度からスタートする e-learning による履修証明プログラムの準備を進めています。臨床検査技師、診療放射線技師、理学療法士の 3 職種は、病院のそれぞれのセクションで日常業務に従事しており、患者さんを「連携して」サポートする機会は少ないのが現状です。そこで両大学は、卒前・卒後を通してチーム医療への意識を高め、実臨床の場で「連携」を実践していただくために、学生および各医療専門職の方々に学部教育プログラムや履修証明プログラムを提供していきます。本事業が円滑に進み、プログラム参加者のお役に立てるように微力ながら努めてまいります。そして将来、本事業が大学の地域貢献のモデルケースになるように、事業期間内にプログラムの改善を進めてまいります。プログラムに参加された方々が他の医療専門職との接点を見出し、自身の病院で実践できる多職種連携を進めていただくことを願っております。


| 筑波医療科学 第 10 巻 第 3 号 | |
|---|---|
| 編集 | 筑波医療科学 編集委員会<br>二宮治彦 磯辺智範 |
| 発行所 | 筑波大学<br>医学群<br>医療科学類 |
| | 〒305－8575<br>茨城県つくば市天王台 1－1－1 |
| 発行日 | 2014 年 12 月 16 日 |